

琵琶湖のコハクチョウ

清水幸男

湖北野鳥センター・琵琶湖水鳥・湿地センター,
529-0365 滋賀県東浅井郡湖北町大字今西

琵琶湖に飛来するコハクチョウは、湖全体が鳥獣保護区になった1971年から見られるようになりました。その後10年程で40～50羽に増加し、今では約300羽が定期的に飛来しています。

琵琶湖は670もある大きな湖ですが、生息できる場所は少なく大部分が北部の湖北町からびわ町に渡ってきます。10月10日頃に第一陣が姿を現し、3月初旬には北へと旅立って行きます。初めは琵琶湖で水草（種類は不明、一番多いカナダモ類は食べない）を食べていますが、水草が少なくなり水田に上がるようになる頃から、湖西地方の新旭町へ40～50羽、草津市の湖岸に20～30羽が分散して行きます。琵琶湖の水草は、その年の生育状況と水位の関係で、長く利用出来る年とほとんど取れない年があります。



図1. 水田のコハクチョウ.

ところで水田に上がったコハクチョウは何を食べているのでしょうか。ほとんどの場合落ち穂か、刈り取った後に再び伸びて穂が実った「二番穂」をエサとして利用しています。しかし、この米もその年の気候に左右され、二番穂の実りが悪いと重要なエサが少なくなってしまう。最近のコンバインは性能がよく、落穂が少ないため二番穂に依存する割合が高いようです。ところが美味しい近江米の産地と言われ水田の多い湖北地方でも、エサの取れる水田はそんなに多くありません。それは、減反政策で約25%が麦を作るため米がない事と、秋には連作を避け新たな水田に麦を作付けるため、全水田の50%は米が取れない水田になってしまうからです。そのうえ冬期の耕作がかなりの面積で行われるため、ますますコハクチョウのエサ場は少なくなってしまう。また、体の大きなコハクチョウは、3反1枚(30m×100m)の水田が連続して何枚か続かないと利用出来ません。エサ場となる水田が虫食い状に残っても、長い滑走路が必要なコハクチョウにとっては利用価値のないものとなってしまいます。その他にも少し水がはってある方が利用しやすい、雁の仲間のオオヒシクイ(約400羽)や植物質のエサを食べるカモの仲間も同じエサ場を利用している等々、実質的に利用出来る水田はほんのわずかしかないようです。積雪時やシーズン後半には、転作の麦の葉を盛んについばんでいます。お米程の栄養分はなくずいぶん苦勞している姿を見かけます。琵琶湖程の大きさがあっても、わずか300羽のコハクチョウしか越冬出来ない理由は、バス釣りやプレジャーボートの問題もありますが、やはりエサの問題が大きいように思います。しかし、湖北野鳥センターから南へ3 km程の湖岸に早崎干拓というところがあり、ここにゴルフ場が計画されましたが実現に至らず、今滋賀県は元の内湖に戻そうと計画しています。昨年11月から一部の水田に水を張って調査を開始しました。昨年の秋にはさっそくコハクチョウが多数入り、他の野鳥も数多く利用するようになりました。魚も増え、この夏にはカイツブリ・オオバン・カルガモ等がヒナを育て、秋にはシギチもかなり見られました。エサ不足を解消するために全国で餌付けが行われ、コハクチョウは案外簡単に成功しています。しかし、自然の状態ですべて自力でエサを取らせ、なお数が増えればこれに勝るものはありません。今琵琶湖の北部でこのような実験がほんの少し芽を出し始めました。この干拓が内湖に復活し、水鳥たちが自力で冬を越せる環境が増え、湖北町の鳥コハクチョウが500羽・1,000羽と、もっともっと沢山来てくれる事を心より願っています。